

には疑問があり、日本産かどうかとも疑わしい。

*Artemisia scoparia* Waldst. et Kitaib., Pl. Rar. Hung. 1: 66 (1802).

*A. sachaliensis* Tilesius ex Besser in Bull. Soc. Nat. Moscou 8: 46 (1835)—Hara, Enum. Spermat. Jap. 2: 127 (1952).

*A. capillaris* var. *γ. sachaliensis* (Tiles. ex Bess.) Pampan. in Nuov. Giorn. Bot. Ital. n.s. 34: 646 (1927)—Kitamura, Compos. Jap. 2: 383 (1940).

*A. capillaris* Thunb. sensu Poljakov in Fl. URSS. 26: 550 (1961), p.p.

Having examined an isotype (Langsdorf 1813) of *A. sachaliensis* in Brit. Mus., I noticed that it is identical with *A. scoparia*, but its exact locality is uncertain.

20) ヒゲナガトンボ (新変種) ムカゴトンボに最も近いが、乾いた時暗褐色になり、唇弁の側裂片は左右に鞭状にのびて長さ 10-12 mm あり、萼片は長さ 3 mm 余、距は長さ 4 mm 内外で下部はハチの胴のように細まっている。この仲間では唇弁の形、特に側裂片の長さが著しく変化することが知られているので、ムカゴトンボの一変種とみなしておく。しかしこのように唇弁の側片が長いものはまだ記録されていない。この類は採集された個体数が少いので、変異の幅をつかむことが難かしい。

*Habenaria flagellifera* Makino var. *Yosiei* Hara, var. nov.

Planta in sicco fusco-brunnea. Caulis 35 cm altus inferne paucifolius. Folia oblongo-lanceolata. Spica 12 cm longa ca. 30-flora. Sepala oblonga 3-3.5 mm longa obtusa uninervia. Petala ca. 3 mm longa uninervia. Labellum basi petalo connatum, superiore trilobum dependens; lobus medius ca. 1.5 mm longus obtusus; lobi laterales divaricati valde elongati flagelliformes 10-12 mm longi. Calcar clavatum 3.5-4.5 mm longum basi angustum.

Kyushu. Prov. Hiuga: Gōnohara, Kitagō-mura, Minami-naka-gun (S. Yosie, Sep. 6, 1936, no. 808, fl.—type in TI).

□ 京都市景勝地植樹対策委員会：京都市の巨樹名木 pp. 102 pl. 160, 1976, 送料共 6350 円。昭和48年以来、委員会の伊佐義朗氏が中心となって調査して来た、老樹名木 160 本の写真集である。京都は北部と東部とに山をとり込んでいるので巨木も多いが市街地には由緒のある名木もあり、それらを見渡すことができる。ことに意味があるのは、昭和14年の調査の数字がでていて、目通りの周りで38年間にケヤキ 73—99 cm, シイ 63 cm などの太り方がわかることである。ナギはたった 5 cm しか太っていない。これをきっかけとしてさらに大木がわかるだろうし、緑化計画にも参考となるであろう。4冊の報告をまとめたものだが、各頁に一件ずつ記してあるのだから、各地域毎に編集し直すか、或は樹種毎に整頓するかしてあったらとおしまれる。(前川文夫)